

未完成ノート

石井 志津夫

寝室の机の上に使用頻度の高い書架がある。これに、立てかけたノートが、もう二年もそのままの状態になっている。そのノートは、NPO法人ピン・シヤン・コロリ研究会が発刊した「私の来し方行く末ノート」(エンディングノート)である。

四年前に肺がんが発見された。担当医師のきびしい宣告を聞いてから、がん治療に専念するも、先の見えない苦悩つづきとなった。日頃から気丈な妻も、ひどく落ち込んでしまい、我が家のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)が著しく低下した。

「このままでは困るは。あなたが万一の時、私がやるべきこと、処理すべきことをできるだけ書き残しておいてくれませんか」と妻からもとめられた。

「わかった。体調の良いときに、手持ちのノートに書いておくよ」と応えたものの、抗がん剤の副作用により、やる気がそがれ、なかなかページは進まなかった。

書き始めて、一年がたったであろうか。

ノートの大半を占める、「もしもの時の備忘録」がほぼ書き終えた。財産に関する事、遺言、ドナー・献体について、かかりつけ医のこと、尊厳死の申請、葬儀、お墓のこと、遺影について記載してきた。

幸い、妻と二人三脚でのお寺さがし、墓地の決定や写真館での遺影の撮影もできた。尊厳死の申請もできた。勿論、延命治療については断る方向でまとめた。大変だったがノート全体の八割は自ら実行し対応できたと思っている。

最後に残ったのは、「私のこと」になった。過去のわたし、現在の私、交友関係についてである。書ける部分は書いたが、ほとんどは手つかず状態になっている。

抗がん剤治療の結果は、良い方向に転じ、大きかった腫瘍が三分の一の大きさになったので、手術可能となった。二年のながい治療を克服した甲斐があった。年の明けた2月に、腫瘍をすべて摘出する手術に成功し、養生に専念する。その後の半年間で、すっかりノートのことを忘れてしまった。

術後の精密検査はクリアー、一年後の検査でも、異常なしがでた。抗がん剤治療からおさらばができて、快適に近い以前の健康生活にもどりつつある。

依然としてダルマのようにノートには手の出ない自分がいる。「もしもの時」「私が倒れたら」という、非常事態を認識したくない、楽天的な自分のさばっているからだ。それに(自分のことを、毎月書いているエッセイで、備

蓄しているから、何とかなるよ)と、自身でなぐさめている面もある。
人間身勝手なものだと思うが、正直な気持ちだからしかたがない。

エッセイ教室 二十四年十一月作品